

「信仰宣言」 クレド

のカテケシス

(V)

「聖なる普遍の教会、
聖徒の交わりを
信じる」

竹山 昭

わたしたちの「信仰宣言」は、基本的に父なる神とイエズス・キリストと聖霊への信仰告白から成っている。最初の回に述べたとおりである。しかし、信仰宣言することにより「聖なる普遍の教会を信じます」と告白する。それは、とりもなおさず、わたしたちの信仰が本質的に「教会的な信仰」であることを語っている。

むろん「信仰宣言」は、父と子と聖霊を信じることと、教会を信じることを全く同列に扱っているとは言えないだろう。日曜日や祭日のミサで用いられるもう一つの信仰宣言定式である「使徒信条」(使徒信条とも呼ばれる)について、W・カスパーはこのことをはつきり指摘している。「使徒信条は、すでに、神と、イエズス・キリストと、聖霊を信じることと、教会を信じることを区別している。教会と教会とともに与えられるすべてのもの、すなわち、秘跡や教導職は、イエズス・キリストにおいて、聖霊によって、われわれの救いに関わる神を信じる場合とは異なった様式で信じられている。信仰は神にのみ直接的な関わりをもち、その固有な内容を形成する。それに対して、教会とその秘跡や教導職は、たんなる救いの手段であり、それらが救いを現実化し、仲介する限り、信仰はそれらと関わりをもつのである」(「現代のカトリック信仰」)。

言うまでもなく、教会は秘跡や教導職に乏しいし、ま

た現実には救いを仲介し、現実化する。実際問題として教会を信じないカトリックの信仰などありえない。カスパーもそれを否定してのことではない。ただ、カスパーが述べていることは信仰の本来の対象が何であり、信仰によってわたしたちが向かうのはどこなのかを明らかにしているのである。「使徒信条」もわたしたちの「信仰宣言」も、以上のことを、その表現形式をもって明示してくれている。父と子と聖霊「を信じる」は、「Credo in」と表現されているのに対して、教会「を信じる」は、「Credo」と表現されているからである。

以上のことを前提に、教会について若干のことを述べておこう。教会について述べることを基に、「聖徒の交わり」についても二、三ふれておきたい。

一、聖なる普遍の教会を信じます

《神に呼び集められた人々の集い》

日本語で「教会」と訳されている新約聖書のは「エクレシア」で、語源的にみれば「呼び集められた人々の集い」という意味になる。新約聖書がこの語を用いたのは、キリスト者とは「イエズス・キリストによって父なる神から呼

び集められた人々の集い」をなす者だとの自覚があったからである。歴史的にみれば、神の民イスラエルが礼拝などに集うとき、その会衆をさして用いられたヘブライ語に由来する。旧約聖書がギリシャ語に訳されたとき、このヘブライ語をエクレシアという語で訳したものだと言われている。

「教会」という日本語からは汲みにくい教会の本質的な性格が、すでにこの「エクレシア」に示されている。その一つは、教会は根本的に「神に呼び集められたもの」という点と、いま一つは「集い」、つまり現代的に言えば「共同体」であるという点である。したがって、教会は本質的には組織でもなく役務の総体でもない。神に呼び集められた人々が形づくっている共同体である。

《共同体とは》

教会がキリスト者の共同体であるとは、現代、常識ともなっているとされる。しかし、教会を共同体としている根拠について確認しておきたい。

学問的な定義はともかくとして、「共同体」はラテン語の「コンムニタス」がそのもとの語にあたる。その形容詞形は「コンムニウス」で、「共有している」、「共通の」という

くらしいの意味である。

共同体と言われるものは、どんな共同体であれ「あるものを共に有している」、「あるものに共に参与している」、「共通の絆に結ばれている」という本質をもつ。共同体とは、ある共通の絆によって結ばれている人々の全体をその絆ともども指している表現だと言えようか。

そうだとすれば、「共有しているものが何か」、「何に共に参与しているのか」、「絆は何なのか」によってそれぞれの共同体の本質と特徴が定まる。参与の仕方や度合い（質と強度）によって、その共同体の強固さが決まってこよう。

これらのことは、わたしたちが経験している種々さまざまな共同体をふり返ればすぐにわかることである。たとえば、家族、会社、何かのクラブやチーム、昔の村落共同体などの類似と相違の理由を少ししていねいにふり返ればすぐに納得できる。

《教会を共同体としているものは》

それでは教会を共同体としているものをどう呼べばよいのだろうか。

聖書も教会の教えも、この点は少なくとも現代では明らかにしてくれている（たとえば、「教会憲章」第一章）。わたした

ちはイエズス・キリストの生涯をとおして父なる神の招きを知り、イエズス・キリストを信じてキリストと一致し、父の子らとされ、子の霊である聖霊をいただく。こうして聖霊という子の霊に生かされてキリストに結ばれ、キリストをとおして父なる神の子らとして父に結ばれる。

少々ややこしい表現になってしまったが、教会を共同体としている根拠、絆は父・子・聖霊の交わりにあつて、わたしたち人間の側の何かにはない。むしろ、信仰と呼ぶわたしたちの応答がなければ、教会という共同体は成立しない。しかし、信仰とは、いわばこの絆への参与行為であつて、絆そのもの、根拠そのものではない。

兄弟愛を絆だと考える人もいよう。しかしその場合「兄弟である」人々同志の愛だからこそ、兄弟同志を結ぶある絆となりうる。兄弟であることは、それ以前に、いや同時に共通の父があり、その父との関係に根拠づけられて初めてお互い同志を「兄弟」と呼ぶ絆が成り立っている。

教会という共同体が一致をその本質とし、聖なる共同体とも呼ばれるのは、それは一致が教会を共同体たらしめているこの根拠の本質的な特徴だからであり、元来、「聖なる」というのはこの絆にこそあてはまるものだからである。教会が普遍的ですべての人々に開かれた共同体であるのも、父・子・聖霊はすべての人々を招き、就中、キリスト者が

直接にまず結ばれるイエズス・キリストがすべての人々のための救い主だからである。

教会が生き生きとした愛に満ちた共同体であり、そうなるべきなのは、共同体たらしめているこの根拠・絆を、聖書は「神は愛なり」と言うからである。

こうして少しふり返ってみれば、教会が存続する限り、おのずと共同体的でないような教会などあろうべくもない。そしてこの同じ根拠が、現にいつそう共同体的であろうと努めるいたらないわたしたちの力と希望の拠り所、可能性の根拠でもあろう。

《教会の神秘——キリストのからだ》

したがって、教会は、人間の現実だけに尽きないものである。呼び集められた人々の方に注目すれば、人間のもつあらゆる弱さと愚かさは教会の中にも見いだすことができる。しかし、この人々の集いは同時にそのうちに、父と子と聖霊の交わりが与えられ、この人々の集いをおして人々に示され、さし出されているような集いでもある。古来、こうした教会の現実、言い表しがたい現実をさすのに、いくつかのイメージ、ないし概念が用いられた。その一つが、パウロが用いる「キリストのからだ」である。

パウロが「キリストのからだ」という表現を用いるのはまず第一に、あの、死に復活したイエズス・キリストの体をさしている。また、聖体の秘跡で言うキリストの体のことである。その同じ「キリストのからだ」を教会をさして用いる以上、この理解の仕方には、キリストとキリスト者の共同体との深い、現実的な一致が言い表されている。それは単なるたとえなどではない。

それは、洗礼と聖体の秘跡にもとづくキリスト者とキリストとの現実的な一致を表している。またそれによって生じるキリスト者同志の有機的な一致を表すのである。

《教会の神秘——新しい旅する神の民》

第二バチカン公会議が特にとり上げた「神の民」との教会理解は、「キリストのからだ」では十分に表しにくい教会の神秘のいくつかの面を表現するのに適している。

言うまでもなく、「神の民」のイメージは、元来、旧約聖書が告げる、神の選びと契約によって生じたイスラエルの民の本質を表現したものであった。他の民々と異なり、イスラエルがイスラエルの民として生存し、独自性をもつのは、ただ神との契約によって神の民とされたからであった。

この契約が民の側の背信によって破られ、新しい契約の

約束が与えられたが、その実現こそ、キリストの死と復活によって実現し、公にされた。このキリストによる新しい契約によって「新しい」神の民、教会が集められた。したがって、キリストの新しいさが、この民の新しいさになる。

契約のもたらす内容が父なる神の子らとなること、子らの生命として聖霊が与えられていること、及び国籍、性別身分や階級の別なくあらゆる人々に開かれていること、などである。

むろん、そこには神が人々を個々ばらばらにでなく、神の民として集めることによって救う（救いの共同体性）ことを望まれていることも明らかとなる。

それだけではない。この民が最終的にどこに向かうかも明らかとなる。「キリストのからだ」が直接にはキリストとの関係を主眼としているのに比べて、「神の民」とは「父なる神の民」ということだからである。

したがってこの民はまだ完成されていない。父のもとに最終的に行き着いてもいないし、いまだ集められつつあるからである。つまり、キリスト教で終末と呼ぶ救いの完成の時を目指して「旅の途上にある」民としての性格を根本的に帯びている。

このイメージが旧約聖書中で約束の国を目指して砂漠を旅するイスラエルの姿から取られたことは言うまでもない。

旅する神の民として自らを理解する教会は、いまだ種々の困難や誘惑、自らの不忠実や疲れがその歩みを困難にし、その姿を歪めることを十分承知していることになる。実際にそうだったし、今も絶えずそれを経験する。

ただ、「あなたがたとともにいる」と約束されたキリストがその実現としてご自分の霊を個々のキリスト者にも共同体そのものにもあたえて導いてくださること、ご自分の体である聖体をもつて養ってくださることに信頼をおく。罪に陥ったときは、ゆるしの源が民の中に与えられていることに慰めをおぼえる。そのひとり子をさえてくださった父なる神の愛に力を求める。内に与えられた聖霊は完成の時のいのちと同じお方であることに希望の源をおく。こうして旅を続けているのである。

こうした教会の中で生きられ、保たれ、伝えられた福音によって自分もまたこの共同体の一員となりながら、わたしたちは「教会を信じます」と告白することになる。

二、聖徒の交わりを信じます

教会が、父と子の霊である聖霊をいただき、同じ父の子らとしての生命である聖霊に生かされている人々の集いであるのなら、お互い同志の間に同じ絆によって結ばれてい

る者同志の生命の交わりを信じるのは、別に不思議なことではあるまい。

元来、「コンムニオ・サンクトールム」(聖なるものの交わり)とラテン語で表現され、ギリシャ語でも全く同じ表現様式が用いられてきた。それが日本語で「諸聖人の通功」と訳されるような意味合いで理解されだしたのが、正確にはいつ頃からなのか、よくは知らない。「諸聖人の通功」と解された限りでは、これは、キリスト者が(亡き人々も含めて)お互いに、その功德を通じて助け合うことができる、というような意味合いに解されることになる。

それを否定するつもりはない。しかし、本来の「コンムニオ・サンクトールム」の意味は、「交わり」としての教会の本質を表現したものであつて、その交わりの性質は、「聖なるもの(複数)」によつて規定されており、この場合、「聖なるもの」は救いの祝福を意味していたと言われている。この一節が信仰宣言の中にとり入れられたのは、教会の本質が救いの恵みによつて規定され、かつ成り立っている、人々の交わりにあることを強調するためであつたろうとも言われる。つまりは、先に述べたような意味での共同体が教会の本質であることを強調するものである。

このことを念頭におく限り、同じ絆、同じ生命に結ばれて生きる人々の間に生けるつながりが存在し、それが助け

合うことを可能にすることを信じることができる。父と子と聖霊の交わりを共同体の絆とする教会は、死の壁を超えて救いの完成の状態にある兄弟たちも、清めの最中の兄弟たちも含むものである。その間の助け合いを信じることができる。

しかしまた、この同じ交わりは、わたしたちの愚かさ、罪、冷淡さと不忠実が兄弟たちを弱らせ、兄弟たちの苦しみをもたらしの苦しみとなすものでもあろう。

(たけやま・あきら 鹿児島教区司祭)

▼本誌3月号56ページで紹介された「生ける石・信徒神学」の書評について、著者から次のようなお便りをいただきましたので、ここに紹介させていただきます。(編集部)

ご厚意にみちた身に余る書評を頂いて有難く思いました。ただお有り頂けるならば、著者として次の一点を特に補注として付加して頂ければ幸に存じます。

書評57頁中段「……司教・司祭のヴォカチオと信徒ヴォカチオが異つた次元のものでありながら密接につながり、……」とありますが、

コンタクトも序に書き、著者もまたド・リュバツクその他引用し、度々執拗にくりかえしたのは、次元(階段の上と下がちがう秩序的な意味)のちがいでなく、性格がちがう(たとえば右近の橋と左近の桜のように、同じ高さ、しかしちがう性質)という重要な点であります。

身分、タテ、上下、序列觀念の強い現況において、特にこの点を強調しておきたく、あえてお願い申し上げました。

(犬養 道子)